

【第2回】 進化し続ける生理学

日本生理学会理事長 石川 義弘

生理学会の創立者の1人である故藤田俊彦東北大学教授の記録によれば、「京都の医学会総会・分科会の機会に急転歩で生理学会が生まれた」とあります。スペイン風邪大流行で世相が不安に満ちた時代で、わずか20人の集まりでしたので、迅速な動きをしたのだと推測します。実際に1922年の第一回生理学会大会の演題数は37題で、2000近い演題数が当たり前の我々からすれば、一体どんな大会だったろうと思います。

今日の日本医学会には138の分科会がありますが、日本生理学会の会員番号は3番です。ちなみに2番が解剖、5番は薬理学会となり、いずれも基礎医学の基盤学会で有数の歴史を持ちます。解剖学会とは定期的に、薬理学会とも合同大会を開催してきたのは、このような歴史的な背景からです。

日本生理学会の会員数は昭和をピークに、近年では減少傾向にあります。これは近年の大学院改革により生理学の名前を冠した講座が減ったこと、初期臨床研修制度の導入により若手医師の参加が減ったのが原因と言われています。その結果として学会会員（評議員、理事を含む）の平均年齢が上がってきました。ちなみに理事の平均年齢（中間年齢も）は還暦を過ぎており、あと数年で理事の大半が定年を迎えることとなります。我が国の人口構成のようですが、多くの基礎系学会で共通の悩みを抱えています。

生理学会はもう会員数が増えることがないのでと言われることがあります。私は会員数の減少

も、学会が進化する過程の一変化にすぎないと考えています。たとえばアメリカ生理学会は150年の歴史を持つ学会であり（1873年の設立）、1万人の会員数を誇ります。しかしこの学会も、50年前には会員数が6000人程度に落ち込む時代を経験しました。この際には積極的に、医学部以外の会員（医学以外の大学院、4年生大学の生理学教員）や外国人会員の入会を推進し、FASEBのExperimental Biology（基礎医学系の複数学会の合同大会）を開催するなど、学会の門戸を広げると同時に、アメリカ基礎医学の横の連携を通じて研究レベルの向上に努めました。とくに生理学教育を生理学の専門分野の一つに位置づけ、生理学の教育者の育成に注力したことは特筆に値します。アメリカ生理学会は強い学会だから残ったのではなく、時代の変化を反映して「進化」したから発展を遂げたのだと思います。

くしくも日本生理学会90周年大会の年に生理学エデュケーター制度が始まりました。100周年を迎える今日では、生理学教育のエキスパート認定制度として認知されています。解剖学会や薬理学会との連携をさらに深める計画も進んでいます。スペイン風邪にかわってコロナが猛威を振るったあとに100周年を迎える我々です。つぎの100年、つまり創立200周年の時代にはどんな生理学会になっているのでしょうか。それを見ることはかなわないでしょうが、きっと時代とともに進化し、今の我々が想像できないような？学会になっていることと期待しています。